私がなぜ現在の科目を選んだか

「糖尿病・内分泌代謝内科」

信州大学医学部附属病院糖尿病・内分泌代謝内科
大久保　洋　輔

自分の進路を意識したのは，大学６年生の夏直前の時期ではなかったかと思います。この時期は，研修先や自分のやりたいことについて自問自答した時期でした。たくさんの疾患が診たい。また，多くの患者さんに全人的にかかわることができたらと思った時点で，内科に標準を合わせたことが始まりでした。

そこでなぜ糖尿病内分泌だったのか…。

いま振り返るとポリクリの際の現教授の駒津先生の講義が記憶に強烈に残った印象があります。何となく理路整然としていてしっくりくる気がするがどこかわかりにくく，なんとも難しい分野だなぁ，いかにも内科だなぁと思った印象でした。その時点で興味をそそられたのは事実です。しかし，学生時代はお世辞にも勉学には自信がなかったので，自分には縁のないものと思い，真剣に糖尿病内分泌を勉強はしていませんでした。

結局，信州を離れ京都の病院で初期研修を行い，糖尿病も含め様々な分野の尊敬できる諸先輩方の後ろ姿を見るなかで，とりあえずやりたいことをやってみようという気持ちに変わっていきました。いろいろな刺激を受け，心の底にくすぶっていた糖尿病内分泌への興味が確実なものに変わっていきました。また，京都に残ることも考えましたが地元であり母校のある信州で研鑽し，貢献したいという思いもあり信大に帰ってきました。

初期研修中，糖尿病に関して「糖尿病は誰でもできる」「なんでそんな科に行くんだ」と言われたことは少なくありませんでした。当時は肩身の狭い思いをしました。確かに一般的な肥満２型糖尿病を診療することに専門性は要りません。むしろ専門外の医師も診察しなければならないほどの数になっています。しかし，これは糖尿病内分泌の一部であり，本当に悲しいことだと今は自信を持って言えます。そういった経験もして，さまざまな周囲の見られ方も知りながら，今この道を歩んでいます。なんだかんだと思いつつ，この分野が好きなのだと再確認する毎日です。

（信大平21年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「産科婦人科」

信州大学医学部産科婦人科学講座
竹　内　穂　高

1983年６月26日15時07分，3,280ｇ，男児。産まれてから27年，初めて自分の母子手帳を開いた。４人分，色褪せることなく大切に一緒に仕舞われていた中で一番古い手帳，定規でひかれた綺麗な体重変化が印象的だった。母子手帳を「見せてほしい」と母にお願いするのは，どこか照れくさくもあった。昨年の冬のことだった。

「私はなぜ現在の科目を選んだか」という題で原稿の依頼を受けたのは産科婦人科医として働き始めて４カ月頃だった。４東西の病棟を行き来する生活の中，“どうして産婦人科を選んだのか”と改めて自分に問うてみたところで，はっきりと言葉にできる理由や理屈はなかった。あまりにも感覚的な側面が大きすぎたのだと思う。

そもそも産科婦人科医を目指し高校生活をおくっていた，ということはなく工学系に興味があった。そして部活動や文化祭の準備に励んでいた。そんな中，身内の不幸をきっかけに目指す道を変更した。大学時代は“行ったことのないところへ行ってみたい，登ってみたい”と登山や自転車旅に勤しむ日々で，海が見たいと自転車で松本から日本海を日帰りしたこともあった。学生時代に希望する科が１つに絞られることはなかった。

初期研修の２年間，大学を離れ南信で過ごした。そこで初めて経腟分娩を見た。学生実習では自分の実習姿勢も相俟って残念ながら見ることがなかった。これから一児の母になろうとする妊婦の静かに耐え力む姿，時を刻む胎児心拍の音，緊張感に支配された空間が一気に和らぐ瞬間，ただ美しかった。人，音，物が，ではなく一連の流れがまるでクライマーが壁に描く１本のラインのように美しかった。数日後，大学の産科婦人科教室にお邪魔した。婦人科手術，産科カンファレンスに参加させてもらい，１日見学に来たくらいでは分からないだろうと思われるかもしれないが，働く先生方はみな優しく教室の雰囲気はとてもよかった。そして入局を決めた。僅か数週間の出来事だった。今は多忙ながらも熱意と優しさのある先生方に囲まれ充実した日々である。

以前の私と同様に希望する科目を絞りきれていない，迷っているという方が少なからずいらっしゃると思う。是非とも産科婦人科医の働く姿や当科の雰囲気を実習あるいは研修で見ていただけたらと願うばかりである。

（信大平21年卒）